

戦後の小学校音楽科教育における「絵譜」の変遷について

長谷川恭子*

* 生活文化学科 音楽教育研究室

The Change of "E-fu" in Music Education of elementary school after World War II in Japan

Kyoko HASEGAWA

Department of Human Sciences and Arts, Jissen Women's University

Right after World War II, in the music of the course of study of elementary school in Japan, "E-fu" (Music Chart of picture) was handled in the introduction stage of Teaching of Solmization was specified. After this, the form of the "E-fu" made a variety of innovations in the history of Music Education. As a result, many kinds of "E-fu" came to be treated.

In this study, I investigated transformation in Elementary Music Education in the post-war "E-fu", and traced the transition. In addition, from the textbook of post-war, I have investigated the frequency with which "E-fu" was treated.

From this study, the history of the "E-fu", pictorial elements and music representation have been taken into account at first, the element fades gradually; it was changed to something close to aspects of staff notation from the introduction stage of Teaching of Solmization was. Currently, treatment of "E-fu" has been declining. Because there is a Music Education drawbacks to "E-fu", the reason is because did not lead to the creation of a systematic teaching of Solmization.

Key words : "E-fu" (Music Chart of picture) (絵譜), Music Education (音楽科教育), elementary school (小学校) after World War II (戦後), Teaching of Solmization (読譜指導)

1. 研究の目的

本研究は、第二次世界大戦後（以下、戦後）の音楽科教育史において、「絵譜」がどのように扱われ、どのような意味をもっていたのかを考察するものである。

第二次世界大戦直後、我が国の小学校の音楽科教育（以下、音楽科教育）では、子どもたちの読譜能力の低さが危惧されており、読譜能力の育成の必要性が唱えられていた。このことは、当時始まった実験学校が、立て続けに三つも読譜に関するテーマで行われたことから窺える¹⁾。当時の学習指導要領においても、読譜指導に関する記述が多くみられる。

そのような状況の中、「絵譜」は、音楽科教育における読譜指導の場面で公的に扱われるようになった。戦後の読譜指導の歴史において、「絵譜」は重要なキーワードのひとつであると考えられる。しかし現在、

「絵譜」は、戦後の音楽科教育の初期にみられたような形態から変容してきている。

ところで、音楽科では、楽譜から楽曲の構成を知るという観点から、楽曲を構成する要素を読み取る（読譜能力）の育成が必要だといえる。長野（2004）は、「楽譜」について「音楽を社会的に認められた一定の約束事に基づいて記号化し、視覚的に記録したもの²⁾と定義している。この「視覚的に記録したもの」から「音楽」を読み取るのが読譜能力である。長野（2004）はまた、「現在、わが国の社会や音楽教育の場では、ヨーロッパで17世紀に確立された近代五線記譜法を用いることが多い。その最大の理由は、現代日本で受け入れられている音楽の大部分がヨーロッパの近代音楽を源流としているからである³⁾」と述べている。日本の音楽科教育においても、教科書で扱われてきた楽譜はほとんどが近代五線譜である。「初心者の読譜や

視唱の能力を育成する目的で、アルファベットや数字などを用いた学習用楽譜が16世紀以降いろいろと考案されてきた(長野 2004)⁴⁾が、日本においては数字譜なども扱われた中で、戦後は「絵譜」が用いられるようになった。そして、「絵譜」は音楽科教育の歴史の中で、少しずつ形態が変容していくのである。なぜ、戦後音楽科教育の読譜指導の歴史の中で、絵譜は変容したのであろうか。

本論の研究手法としては、戦後における「絵譜」の変遷について、学習指導要領および指導書、教科書をもとに概観する。また、「絵譜」が扱われるようになった当時の文献から、音楽科教育界において「絵譜」がどのように捉えられていたのかを検討する。これらをふまえ、音楽科教育における読譜指導の歴史において「絵譜」がどのような意義をもっていたのか、またどのように変化したのかについて考察する。

2. 戦後における「絵譜」の変遷

2-1 変遷区分

小学校の学習指導要領の音楽編(以下、学習指導要領)において、「絵譜」が扱われているのは、1947年刊行(試案)と1958年刊行、1968年刊行である。

「絵譜」という言葉は1977年刊行以降、学習指導要領では使われていないが、その理由については記述がない。しかし、学習指導要領で使われなくなって以降も、『指導書』、『解説』においては、「絵譜」という言葉が使われている。

このことをふまえ、本論では表1をもとに、「絵譜」の変遷を以下のように時代区分することとする。

- 第1期：学習指導要領 1947・1951年刊行
- 第2期：学習指導要領 1958・1968年刊行
- 第3期：学習指導要領 1977・1989・1998・2008年刊行

表1 学習指導要領における「絵譜」の有無

学習指導要領	1947	1951	1958	1968	1977以降
「絵譜」の有無	○*	×	○	○	×

※1947年の学習指導要領では、「音楽絵画」と表記されている。

2-2 「絵譜」の変遷

(1) 第1期

a. 1947年刊行学習指導要領(試案)

前述のとおり、戦後の音楽科教育では、子どもの読譜能力の低さが危惧されていた。そのため、戦後直後の音楽科教育では、読譜指導のためにあらゆる試みがされている。『学習指導要領 音楽編(試案)』(1947)では、読譜指導のための工夫に関する以下のような記述がみられる⁵⁾。

音楽絵画とは(中略)、旋律とこれを構成する諸要素とを、歌詞を利用して直接に結びつけたもので、子供の想像力を豊かにすると同時に楽譜の教育にも役立つものと考えられる。

この記述にある「音楽絵画」こそ、後に「絵譜」と呼ばれるようになったものである。この記述から、「絵譜」が初めて学習指導要領で取り上げられた際、「音楽絵画」という言葉で示されていたことがわかる。

学習指導要領には、最初のページに国定教科書『一ねんせいのおんがく』(1947)の第1曲目である「みんないいこ」(譜例1)の「音楽絵画」(絵譜)が掲載されている(図1)。『一ねんせいのおんがく』では、「みんないいこ」は左ページに楽譜、右ページに「音楽絵画」が掲載されており、この「音楽絵画」には歌詞が付記されている。

近森(1947)は、「これは、挿繪(筆者注:「音楽絵画」のこと)によつて児童の興味を呼びおこすと同時に、音の高低や長短などに對しても注意させるようにしたいとの考えからである。(中略)挿繪をたゞ美しい繪として取扱うだけでなく、リズム、旋律などの音楽の要素を學ばせる手がかりとして、有効に用いたゞき度い。」⁶⁾と述べている。この記述から、「音楽絵画」は楽曲の歌詞の内容を反映した挿繪というだけでなく、読譜の手助けとなる役割を担っていることがわかる。中野(1947)は、このように「挿繪を音楽の節奏・旋律に合致させたこと」⁷⁾は教科書の新しい企画のひとつであったと述べている。この「音楽絵画」の特徴として、小出(1947)は「從來の挿畫は、歌詞の内容を示すものであつたのが、新教科書では、歌詞の内容のみならず音楽的要素のわかるように考案されている」⁸⁾ことを挙げている。これらの記述から、簡易的な楽譜の要素を兼ねた挿繪を教材として教科書に取り入れたことは、戦後の音楽科教育界では画期的であると捉えられていた様子がわかる。

みんな いい こ

作詞 三島 重三
作曲 三島 重三

♩ = 96

一 お は な を か ざ る
二 き れ い な こ と ば
三 な か よ し こ よ し

み っ ち ゃ ん
み っ ち ゃ ん
み っ ち ゃ ん

譜例1 「みんないいこ」の楽譜⁹⁾

みんな いい こ

一 お は な を か ざ る
二 き れ い な こ と ば
三 な か よ し こ よ し

み っ ち ゃ ん
み っ ち ゃ ん
み っ ち ゃ ん

図1 「みんないいこ」の「音楽絵画」(絵譜)¹⁰⁾

しかし、当時の教科書に掲載された「音楽絵画」は、読譜の導入指導の教材として使用するには間違いも多かった。その実例について、三島(1947)は「位置が高すぎたり、低すぎたり、数が多かつたり、短い音符や休符が大きすぎたり、絵が抜けていたりしている¹¹⁾」と述べている。長谷川(2013)は、「みんないいこ」の「音楽絵画」(図1)について「音高の変化は理解できるが、リズムが不明瞭である¹²⁾」と述べ、音価の違いを子どもの大きさの変化で区別しているが、それがわかりにくいと指摘している(図1)。歌詞「みんな」の「み」にあたる箇所。二分音符[2拍]を表しているが、他は四分音符と四分休符[1拍]を表している。「音楽絵画」は読譜指導の教材としては欠点が多く、簡易化した楽譜としての役割を充分に果たすことは難しかった。

このように、文部省では読譜指導のために工夫を凝らした「音楽絵画」を扱うことにしたのであったが、

音楽科教育界からは音の高低やリズムの表記の不明瞭さが指摘されていたことが確認できた。つまり、挿絵の要素が強かったため、簡易的な楽譜としては不足な点が多かったのである。さらに筆者は、「音楽絵画」は音階の構成に関する配慮がされていなかったことも、簡易化した楽譜としての役割が不足していた点のひとつであることを付け加える。「みんないいこ」でいえば、階名ミ-ソの短3度(全音ひとつと半音ひとつ)。例えば、歌詞「おはな」の「おは」の部分)と階名ミ-レの長2度(全音ひとつ)。例えば、歌詞「みんな」の「みんな」の部分)は、階段の高さはミ-ソがミ-レの約二倍の幅で表されている。しかし、音高は正確には均等に二倍ではないし、絵をよく見ないと二倍とも気づきにくい。音階の構成を意識していない。こういった意味で、「音楽絵画」は音楽性に欠けている。つまり、音程(全音と半音の区別など)が不明瞭なのである。

表2 『小学校学習指導書』(1953)における視唱への準備と実際例(抜粋)

視唱への準備	実際例(例1~7は抜粋)	
読譜の練習 ○拍子打・リズム打・リズム唱—リズム符との結びつけ。 ○音楽に対して身体的リズム反応をする。 ○階名模唱・既習曲の階名唱—音楽語いの習得。 ○音階図による音階練習。 ○五線および紙鍵盤の遊戯化。 ○譜ならべ(おはじきならべ)旋律カードによる指導。	(例1) おはな	(例4) 強い音、弱い音(リズム)
	(例2) おんかいあそび	(例5) 拍子のけいこ
	(例3) 音符をぬる	(例6) 高い音・低い音
	(例7) 楽譜を見ながら(本をもたせて)暗唱歌を歌う。	(例8) 暗唱歌の中から特徴のあるフレーズを取出してドレミで歌う。
	(例9) 比較的短くまとまったことばのついたフレーズを歌う。	

b. 1951 年刊行学習指導要領（試案）

1951 年の学習指導要領では、「音楽絵画」や「絵譜」という言葉は使われていないが、この指導要領に対応する指導書では、「絵譜」が扱われている。1953 年刊行の『小学校学習指導書』では、視唱への準備として予想される活動を表 2¹³⁾ 左側（歌唱への準備）のように列挙している。これらに関する実際例は、表 2 右側のように示されている。例 1、2、3 は絵譜を用いている。このことから、「絵譜」は、視唱活動を目指した指導の一部として扱われていたことがわかった。また、2-2(1)「a.1947 年刊行学習指導要領（試案）」の「音楽絵画」と比べると、音階を表す工夫が加わっており、より音楽的な要素が加味されている。

(2) 第 2 期

a. 1958 年刊行学習指導要領

「絵譜」という言葉は、学習指導要領においては 1958 年刊行で初めて扱われている。この学習指導要領では、「目標」で読譜指導に関して述べられている。おおまかな内容としては、第 1 学年および第 2 学年では「読譜能力の素地を養う」こと、第 3 学年および第 4 学年では「読譜および記譜の基礎能力を伸ばす」こと、第 5 学年および第 6 学年ではさらに「自主的な学習ができるようにする」ことが目標とされている。このことから、学習指導要領では 6 年間にわたる読譜指導の体系が示されていたことがわかる。

歌唱領域では、第 1 学年および第 2 学年の「読譜の基礎能力を養う」ための指導内容のひとつとして「絵

譜を見ながら歌詞や階名で歌う」ことが示されている¹⁴⁾。これについて、第 2 学年の「指導上の留意事項」には「読譜の準備的な指導としての階名唱やリズム唱などは、第 1 学年に引き続いて行っていくが、さらにリズム譜や絵譜などを有効に活用することによって、第 3 学年からの五線の楽譜の学習へ徐々に近づけていく」と説明されている。第 3 学年以降になると階名模唱や階名暗唱、視唱、記譜などの活動が設定されていることから、「絵譜」を使用する目的は楽譜を読み取る能力の基礎を形成することであったとわかる。

「絵譜」の分類については、決まった呼称はないが、文献によりさまざまな表現で分類されている（表 3）。

横溝（1958）は、「読譜の指導大系」について、「絵譜」の段階では表 3 左端の 4 項目を扱うと述べている¹⁵⁾。これらを扱った読譜の指導段階について、横溝（1958）は「①一年生では絵譜、仮名譜の段階から五線上の仮名譜へ。②二年生では五線上の仮名譜から白抜き音譜へ。③3 年生では白抜き音譜から本譜へと発展し、移行の時期は三年の半ば頃から後期にかけてと見てよいのではないか。」¹⁶⁾と述べている。

第 4 回全国小学校音楽研究大会報告（深町 1959）では、「視覚面の読譜指導段階」として、「絵譜」の種類に相当するものとして表 3 中央左の 7 項目が挙げられている¹⁷⁾。

桜井（1961）は、「絵譜の考え方」として、表 3 中央右の 3 項目を挙げている（p.26）¹⁸⁾。桜井（1961）は、「絵譜」について「未分化の児童に対して、楽譜にかわるものを文字や図形等で表現し、音高やリズム

表 3 文献における「絵譜」の分類

横溝（1958）	第 4 回全国小学校音楽研究大会報告（1959）	桜井（1961）	田辺（1962）
①歌詞譜（高低をつけて書いた歌詞） ②高低仮名譜（歌詞の代りに階名を書きこんだ絵譜） ③リズム譜 ④白抜き音譜（階名入り音譜）	①歌詞譜 ②高低のついたかな譜（階名模唱） ③リズム譜 ④間引きかな譜 ⑤線を与える（一線 三線） ⑥調号なしの五線（調にこだわらぬ） ⑦白抜き譜	①音高絵譜：階名文字譜と歌詞絵譜 ②一線累加式の絵譜系統 ③リズム絵譜	①歌の中の短い旋律を、題や内容に関係ある動物や花の絵で示しているもの ②①の圓に歌詞を入れてあるもの ③ドレミの階名を入れてあるもの ④拍子やリズムのみを表わしたものの ⑤五線に丸を入れて階名や歌詞を入れたもの ⑥五線譜に行くまでに、一線ずつ累加して本譜に近づいていくもの ⑦本譜に近い絵譜で、白抜きに階名や歌詞を入れてあるもの

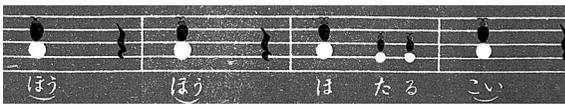
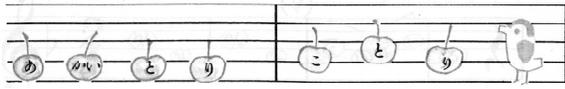
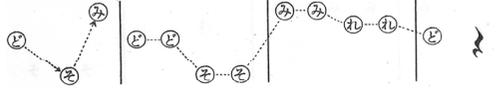
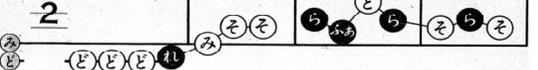
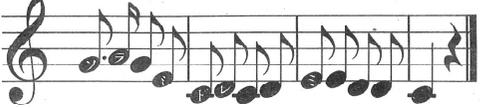
楽器の演奏等を実感的にわからせようとする試みであって、一定共通の形式や学問的な裏づけのあるものではない。(中略) 階名素読の段階(読譜への準備)から階名視唱への発展をはかり、音高感覚の育成を助けるものであり、理解を深め、学習への興味をおこさせ、意欲を高めながら本譜視唱への措置を培うものである¹⁹⁾と述べている。

田辺(1962)は、「絵譜」の類別について、表3右端の7項目を挙げている²⁰⁾。また、田辺(1962)は「絵譜」から五線譜へ移行する過程における「絵譜提示の順序」については、「1、歌詞のついた絵譜」「2、階名のついた絵譜」「3、五線の併用」「4、五指でドレ

ミ遊び」「5、かな譜」「6、音符ならべ²¹⁾」の6項目を挙げている。このうち、「絵譜」に相当するものは、1、2、3、5である。

これらの「絵譜」の分類は、指し示す内容はおおよそ同じであるが、項目立ての方法は統一されていない。また、かなを用いたり、白抜きにした音符のような形態を扱うなど、絵ではない様相のものも含まれている。これらのことから、第2期の「絵譜」の概念は、挿絵のようなものから簡易楽譜のような意味合いにまで及んだ、非常に広いものとなっていたことがわかる。

表4 「絵譜」の分類(旋律の高低を表わしたもののみ)²²⁾

絵譜の分類	解説	絵譜の例
挿絵高低譜	挿絵の役割を持っているが、旋律の高低が表わされているもの。階名や歌詞が書かれているものも含むが、五線のように本譜を連想するものは含まない。	
五線絵譜	五線(または五線を連想させる線)の上に、歌詞に合った絵(花や星など)で旋律の高低が示されたもの。絵を使っているが、本譜に近い様相であるもの。歌詞が絵の下に書いてある場合はあるが、絵の中に歌詞や階名は書かれていない。なお、ト音記号の有無は考慮に入れない。	
かな絵譜	絵または白抜きの丸の中に歌詞が書かれているもの。旋律の高低を表わしていないものは含まない。一線累加式、五線とも含む。五線になると、白抜きの音符または普通の音符の中に歌詞が書かれている場合もある。	
白抜き一段階名譜	絵または白抜きの丸の中に階名が書かれているもの。旋律の高低を表わしているもの。	
白抜き一線累加式階名譜	一線や三線のような様相に、絵や階名が書かれた白抜きの丸または白抜きの音符で旋律の高低が表わされているもの。一曲の中で一線累加式から五線に至るようなものについては、この項目に含む。	
白抜き五線階名譜(全曲)	全曲をとおして、五線の上に階名が書かれた白抜きの丸または白抜きの音符で旋律が書かれているもの。五線譜の形態で、音符の中に階名が書かれているものも含む。なお、ト音記号の有無は考慮に入れない。	
白抜き五線階名譜(一部)	五線の上に階名が書かれた白抜きの丸または白抜きの音符で旋律が書かれているが、前出の音には階名が書かれていないなど、全曲のうち一部だけであるもの。五線譜の形態で、音符の中に階名が書かれているものも含む。なお、ト音記号の有無は考慮に入れない。	

る。挿絵高低譜が扱われていたのは、第1学年のみである。挿絵高低譜や五線絵譜など、絵画的要素が比較的強いものの頻度は第1学年が最も多いが、かな絵譜や「白抜き」の4項目を扱った「絵譜」の扱いの頻度は、第2学年が多い。第3学年になると、かな絵譜を扱う頻度は少ない。また、「白抜き」の4項目は扱われているものの、五線を扱ったものに偏っている。このことから、絵画的なものから五線譜に近いものまで扱い、「絵譜」を系統的な読譜指導の教材として配置していたことがわかる。

第2期から第3期の1977刊行版学習指導要領に対応する教科書まで、第1学年においても白抜き五線階名譜（全曲および一部）を扱っている。前述したように、1968年刊行学習指導要領において「絵譜は、五線の楽譜への導入に役立つものが望ましい」としていた時期において、読譜導入指導の模索期であったことが窺える。この時期を経て、挿絵高低譜、五線絵譜、かな絵譜は淘汰されたものと考えられる。第3期以降、挿絵高低譜と五線絵譜は扱われていない。さらにかな絵譜も1977年刊行学習指導要領に対応する教科書以降扱われなくなり、現在も扱われているのは「白抜き」の4項目のみである。また、第3期では、第3学年で扱われることは次第に少なくなっている。2011年刊行学習指導要領に対応する教科書では、「絵譜」自体の扱いも少ないが、第3学年では皆無である。

このように、「絵譜」の変遷は、初期は多くの種類が存在していたのであるが、読譜の導入指導に相応しいものを求める中で、時代とともに精選されていき、楽譜の様相に近いものが残ったという歴史であることがわかった。

4. まとめ

本稿では、小学校の戦後音楽科教育における「絵譜」の変遷について研究した。「絵譜」は、次の理由から低学年の読譜指導の導入期に利用されたことがわかった。すなわち、「絵譜」は、読譜能力を系統的に育成する導入指導を模索した過程で、五線譜に抵抗をもつことなく慣れさせるために取り入れられた教材であり、その指導法を発展させるために変化をしてきた。しかし、読譜を容易に行うために取り上げられた「音楽絵画」には、リズムや階名の扱いに不足があった。そこで、より五線譜に結びつけ易い様相で、なお

かつ簡易的に音楽を視覚化したものを追求した結果、「絵譜」は変容し続けてきたのである。

「絵譜」の変遷は、楽譜を簡易的に表し、さらに歌詞の内容を受け取り、想像を豊かにするものであったのが、より五線譜に移行し易くする目的に合わせて工夫を重ね、さらにそれを精選してきた過程であることがわかった。系統的な読譜指導の導入の教材開発に目を向けさせた点においては、音楽科教育において「絵譜」を取り上げたことは意味があった。しかし、結果的に「絵譜」は教科書から姿を消しつつある。現状では、「絵譜」を読譜指導の導入期の教材というには、教科書の掲載頻度は少ない。このことから、現在において、「絵譜」は系統的な読譜の導入指導を行うために配置されているとは到底いうことができない。

「絵譜」が使用されなくなってきた理由は、五線譜への移行にこだわりすぎたことにあると考える。読譜をするということは、音楽を総合的に読み取るということであり、五線から音価や音高のみを読み取るような絶対的理解ではない。読譜から音楽を再現するためには、階名（調性）の理解が必要であり、再現力（音楽表現）も必要である。つまり、ソルフェージュの概念が必要なのである。読譜指導の導入期で扱う簡易楽譜という目的で「絵譜」を取り入れるのであれば、曲想を表すような絵画的要素を加味するよりも、ソルフェージュの概念から指導する内容を設定し、それに合う楽曲を選択して「絵譜」を作成すべきである。そういった意味では、日本の「絵譜」の現状は、曲想を取り入れることや五線譜への移行に特化し過ぎるなど、ソルフェージュの概念をふまえた楽曲の選択はされていない。また、現在の「絵譜」は、階名を扱ってはいないものの、読譜指導の導入段階において効果を上げられるような様相ではない。現行の学習指導要領では、読譜指導の内容として挙げられている調性はハ長調とイ短調のみであるため、「絵譜」に書き込んだ階名の効果が発揮されないのである。階名は、移調をしてこそ、調性感を養うという意味で音楽的な意味をもつものである。この意味において、特に白抜き五線階名譜（全曲・一部）は、完全な五線譜に〈ドレミ〉を書き込んだ様相が固定ド唱法の印象を与え、調性感の育成を阻むと考える。つまり、現在の絵譜の取り上げ方は、単に五線譜を読む訓練のための段階的な道具になっており、音楽的な活動のための教材としては意

味をなしていない。このため、発展性がなかったのである。

この原因は、指導内容よりも教材が先行している日本の音楽科教育の在り方にあると筆者は考える。つまり、「絵譜」を音楽的な教材として発展させるためには、その指導内容が音楽的に系統性を持っていなければならない。そのためには、その指導内容を系統的に指導していくための「絵譜」の開発をしていかなければならなかったのである。このような「絵譜」の開発ができれば、読譜指導において「絵譜」はより音楽的で発展性をもった教材となり得ると考える。

注

- 1) 最初の実験学校は、1950年度の横浜国立大学附属鎌倉小学校（「読譜能力の発達について-リズムおよび階名素読に関する研究-」）。次は1951年度で、東京都中野区立江古田小学校（「読譜能力はどのように発達するか-移動ド唱法による-」）と神奈川県鎌倉市立玉縄小学校（「児童の読譜能力の発達について-固定ド唱法による-」）。
- 2) 長野俊樹（2004）、p.229
- 3) 4) 同前書、p.230
- 5) 文部省（1947a）、p.40
- 6) 近森一重（1947）、p.10-11
- 7) 中野義見（1947）、p.8
- 8) 小出浩平（1947）、p.3
- 9) 文部省（1947b）、p.2
- 10) 文部省（1947a）
- 11) 三島安秀（1947）、p.11
- 12) 長谷川恭子（2013）、p.30
- 13) 文部省『小学校学習指導書 音楽科編』（1953）「第3章 歌唱の指導法」の「10 読譜の練習」より、「(1) 視唱への準備」を引用。
- 14) 同前書「第5節 音楽」における「第2 各学年の目標および内容」より、第1学年および第2学年の「2 内容」から抜粋。
- 15) 横溝とよ（1958）、p.82
- 16) 同前書、p.82
- 17) 「第8回分科会 読譜指導はどのようにしたらよいか」（第4回全国大会報告）1959、p.86
- 18) 桜井富夫（1961）、p.26。
- 19) 同前書、p.26
- 20) 田辺辰雄（1962）、p.30

- 21) 同前書、p.31より項目を抜粋。
- 22) 絵譜の例の出典は、以下の通り。挿絵高低譜：『しょうがくせいのおんがく1』（1953）p.11、五線絵譜：『音楽の世界へ1 てをうちながら（改訂版）』（1951）p.14、かな絵譜：『改訂しょうがくせいのおんがく1』（1956）p.38、白抜き一段階名譜：『しょうがくせいのおんがく1』（1953）p.17、白抜き一線累加式階名譜：『標準 しょうがくせいのおんがく2』（1960）p.16、白抜き五線階名譜（全曲）：『標準小学生の音楽4』（1956）p.12、白抜き五線階名譜（一部）：『音楽の世界へ1 てをうちながら（改訂版）』（1956）p.53（全て教育出版）
- 23) 『小学校学習指導要領』（1968）「第5節 音楽」における「第2 各学年の目標および内容」より、第1学年の「2 内容」における「A 基礎」の(2)より引用。
- 24) 教育出版を選択した理由は、国定教科書直後の1948年から全学年分を出版しているからである。

参考文献

- 小出浩平（1947）「昭和二十二年の回顧」『教育音楽』2（8）、pp.2-6
- 桜井富夫（1961）「読譜指導の背景としての絵譜」『教育音楽 小学版』16（8）、pp.26-27
- 田辺辰雄（1962）「絵譜にたよるな」『教育音楽 小学版』17（11）、pp.30-31
- 近森一重（1947）「新音楽教科書とその取扱い」『教育音楽』2（2）、pp.10-16
- 東京都中野区立江古田小学校（1954）『音楽学習指導の形態と読譜指導の一つの形態—音楽語いによる—』東京都中野区立江古田小学校
- 中野義見（1947）「新教科書に対する感想」『教育音楽』2（6）、pp.8-11
- 長野俊樹（2004）「読譜法」日本音楽教育学会『日本音楽教育事典』音楽之友社、pp.228-232
- 長谷川恭子（2013）「終戦前後における歌唱指導と音感教育に関する一考察—小学校低学年に着目して—」日本声楽発声学会『声楽発声研究』第4号（研究誌通算45号）
- 「第8回分科会 読譜指導はどのようにしたらよいか」（第4回全国大会報告）『教育音楽』14（8）、p.86（1959 文責：深町幸二）
- 三島安秀（1947）「新音楽教科書批判」『教育音楽』2（6）、pp.11-13
- 文部省（1947a）『学習指導要領 音楽編（試案）』
- 文部省（1951）『小学校学習指導要領 音楽科編（試案）』
- 文部省（1953）『小学校学習指導書 音楽科編』教育出版株式会社

文部省 (1958) 『小学校学習指導要領』

文部省 (1968) 『小学校学習指導要領』 日本学芸協会

文部省 (1977) 『小学校学習指導要領』

文部省 (1989) 『小学校学習指導要領』

文部省 (1998) 『小学校学習指導要領』

文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』

文部省 (1969) 『小学校指導書 音楽編』

横溝とよ (1958) 「低学年における読譜の準備とその移行について」『教育音楽 小学版』13 (3)、pp.81-83

【教科書】

文部省 (1947b) 『一ねんせいのおんがく』

文部省 (1947c) 『二年生の音楽』～『六年生の音楽』

教育出版 1948～2011 小学校音楽科教科書 第1～6学年